

グローバル時代における高等学校の異文化交流授業 －その意義と効果－

Cultural Exchange Teaching for High School in the Globalized Era; Its Meaning and Effect

佐野 光彦

(要約)

グローバル時代における高等学校の異文化交流授業の意義と効果を考えるために、神戸学院大学と兵庫県立伊川谷高等学校が高大連携で行っている異文化交流授業を取り上げた。同授業では、バングラデシュを例にあげ、その文化、格差・差別・貧困・人権などの社会問題、自然・環境・景観などの保護の問題について、生徒たちと共に考えた。また、彼らは異文化にふれる面白さ、大切さを学び、多文化共生についても理解を深めた。今後は、この異文化交流授業を文部科学省が提言する自己のアイデンティティ確立などを旨とする国際教育へどのように橋渡ししていくのか、高大連携の強化をどのように図っていくのかなどが考察すべき課題である。

キーワード：グローバル化、異文化交流授業、高等学校、高大連携、国際理解教育

Key Words : Globalization, Cultural Exchange Teaching, High School, Bilateral Collaboration
between University and High School, Education for International Understanding

1. はじめに

インターネットが急速な勢いで普及し、今や発展途上国においても、携帯電話やスマートフォンでニュースをチェックするのが日常化している。もはや世界で起こっているできごとを入手することに関しては、国境は存在しない。今年（2014年）に入り、ISIL（イラクとレバントのイスラム国）のニュースが連日報道され、その残虐行為から、イスラム教徒＝テロリスト、イスラム＝すべて悪というイメージを私たちは往々にして持ってしまう。しかし、それは正しい行為かどうかを疑う目を持たなければならない。つまり、異文化に対する理解を深め、溢れる情報から正確な部分をチョイスすることができる習慣を身に付けることが必要である。

このことは、成人してからも身に付けることは可能であるが、様々なものがボーダレスのこの時代には、できるだけ若いうちから身に付けた方が良いように思える。換言すれば、小中高大学において、異文化交流、異文化理解などの教育の必要性が高まっていくことを意味する。これに対して文部科学省は、2002年の学習指導要領の総合的な学習の時間の中に「国際理解」を盛り込み、この後、国際理解教育の取り組みが各学校で盛んとなっていった¹。そこで本稿では、神戸学院大学と兵庫県立伊川谷高等学校で行われている高大連携科目である、「異文化交流授業」を例に、高等学校で行われている異文化理解教育の意義と効果を明らかにしたい。

2. 国際情勢の変化と教育

2-1 国際化からグローバル化、そしてグローバル化へ

日本を取り巻く国際情勢の変化にともなって、国内ではそれに対応する様々なキーワードが生み出されてきた。そして、その変化に対応する人材を生み出すために、文部科学省も答申を出してきた。ここでは、以下の3つの言葉と文部科学省の特にグローバル化社会に対応する教育に関する答申について整理を試みる。

(1) 国際化

国際化という言葉は、ブリタニカ国際大百科事典によると、「もともとは国家と国家との相対的な関係を示す言葉であったが、今日、日本で多用されるようになった国際化という言葉にはさまざまな意味合いが含まれており確たる定義はない。すなわち、自給自足・閉鎖型から相互依存・共存型に国家の体制を変えていくことであつたり、他の国家と肩を並べていくために応分の負担をすることであつたり、あるいは他の国からのヒト・モノ・文化・情報などの流入に対し広く門戸を開くことであつたりと、対象や状況の違いによって幅広く使われている。」定義されている（ブリタニカ・ジャパン 2011）。日本は長らく外国との関係を考える場合、この国際化という言葉を使用してきた。そして、国際化を推進するとした時、日本からモノを輸出する、海外からモノを輸入する、海外に留学する、留学生を受け入れるなど、国際交流が盛んになることを目指していた。日本が昭和後期から平成初期にかけてバブル経済期だった頃、多くの若者たちが国際化を意識し海外に渡っていっ

た。その後、バブル経済が崩壊し、1990年代半ばより国際化に変わる新しい言葉、グローバル化がポピュラーな単語として登場する。

(2) グローバル化

グローバル化時代に突入したと叫ばれて久しい。それは経済分野では、各国内での貿易と投資の自由化が進み、人、モノ、カネが国境をボーダレスに越えていく時代への突入である。つまり、今までの国際化では国と国との関係を考えていれば十分だったが、グローバル化の時代は地球規模でものごとを考えなければならなくなった。黒崎卓、山形辰史によれば、グローバル経済下では、交易の自由化によって事物の国際交流が進み、地球規模の効率化が推進され、また、同じ種類の生産要素をもつ人々の国際的な所得格差を縮めることができるとし、このことから発展途上国の中には、海外からの投資によって製造業などの工場誘致に成功し、輸出が堅調に伸び、経済が活性化された国々もあらわれた²。これは、ある一国の格差社会を議論するにも、地球規模で考えなければならないことを意味する。また、環境問題、紛争、疫病についても同様である。もはや日本の繁栄は、日本のことのみを考えればいい時代ではなくなってきている。

(3) グローカル化とは何か

グローカル化とは、地球規模で進んで行く世界普遍化の流れであるグローバル化と、それとは対照的に地域限定で進んでいくローカル化 (localization) との合成語のことで、どちらも同時並行にあらわれてくるとされている。経済の分野では、世界標準のものさえ生産すればどこでも売れるというのではなく、その地域のことも考えてマーケティングする必要性もあることから、この言葉は使用された。また、この言葉はNGOがよく使用する、「Think Globally, Act Locally : Think Locally, Act Globally」(世界的視野で考えて、地域で行動する : 地域のことを考えて、世界で行動する) という言葉と関連性があるといわれている。近年、外国人労働者の増加にともない日常生活で外国人との接触が増えてきている。社内公用語を英語にする企業などもあらわれた。またバブル崩壊以後の個人消費低迷を、外国人観光客を取り込むことで打開を図ろうとする地方自治体などは、積極的に地元の情報を世界に発信している。この動きに外務省も、地方自治体と連携を図るグローカルネットを立ち上げている。坂本利子によると、在留外国人の増加、1980年代には1万人未満だったものが2011年には26万人以上に増加した留学生数などを考慮すると、日本社会の多文化化は確実に進んでいるとしている³。つまり、現代社会では国内においても外国人との交流機会が増え、グローバルにものごとを考え、地域や世界で活躍する人材が求められている。文部科学省も以下で整理するように、それに添った提言を出している。

2-2 グローバル化時代の次世代教育

こうしたグローバルやグローカルな時代に、文部科学省も新しい方針を示すことになった。その背景には、現代日本の若者の内向き志向があるとされる。図1は、日本から海外への留学生数の推移である。これによると、ピークであった2004年の8.2万人から2008

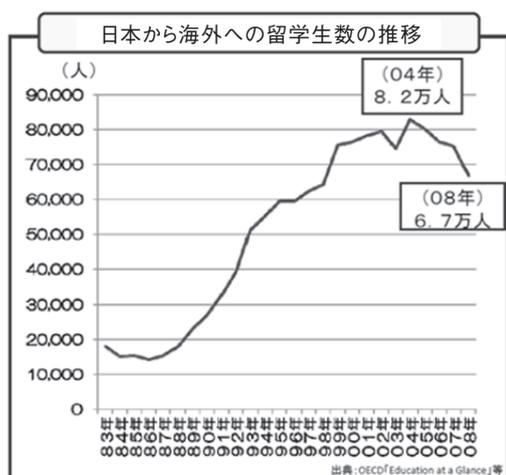


図 1. 日本から海外への留学生数の推移
(出所) 文部科学省 HP

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/_icsFiles/afieldfile/2012/02/14/1316067_01.pdf (2014年10月25日閲覧)

年は6.7万人に減少している。この現状に対して文部科学省は、国際交流政策懇談会の最終報告書「我が国がグローバル化時代をたくましく生き抜くことを目指して—国際社会をリードする人材の育成—」の中で、以下のように提言している。

「グローバル化時代において我が国が存在感を高めていくためには、国際社会が模索する新たな制度構築の過程に積極的に参画していく必要がある。そのためには、我が国がこれまで推し進めてきた「知の国際化」をさらに加速させ、「平成の開国」を支える礎にしていかなければならない。」とし、資源の乏しい日本の生き残り政策として、知の国際化

を訴えた⁴。

さらに、それらを実現するために、「グローバル化した国際社会をリードする人材に求められる能力は、日本人としての素養、外国語で論理的にコミュニケーションをとれる能力、異文化を理解する寛容な精神、新しい価値を生み出せる創造力であると考えられる。国際社会で活躍する人材に求められる能力というと、とかく語学力が挙げられることが多いが、まずは国際社会で自らの考えや立脚点を隠することなく主張できる能力が必要であり、その際、我が国固有の文化や歴史に関する正しい知識を身につけ、自らのアイデンティティに係る自信と謙虚さを持つことが重要である。(中略) 現在の子どもたちが、国際的に通用する人材として育成されるためには、幼少期から青年期に渡るあらゆる教育段階において、グローバル化に対応する教育を提供する必要がある。」として、初等中等教育における異文化理解、国際協力、国際教育の強化、高等教育においては大学の国際化の必要性を説いた⁵。

3. 高大連携と異文化交流授業

2章で国際情勢の変化に生み出されたキーワードと、それに対応した文部科学省の答申について整理した。ここでは、文部科学省の答申に基づいた高等学校の具体的な取組を取り上げてみる。その例として、神戸学院大学と兵庫県立伊川谷高等学校が高大連携の一環として取り組んでいる異文化交流授業について、その意義と効果について考えてみる。

3-1 神戸学院大学と高大連携

高大連携とは、高校と大学が連携して行う教育活動のことで、高校生が大学の公開授業に参加したり、教員などが高校に出向いたりするものや、高校と大学で協定を結んで独自のプログラムを組む場合もある。1999年に中央教育審議会が大学と高校を通じた全体教育の必要性を訴える答申を出したのを機に全国的に普及した⁶。高大連携の重要性が指摘

されるようになった背景には、1998年に出された大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について一競争的環境の中で個性が輝く大学一」において、学部教育と高等学校教育との関係に触れていたこと、第14期教育課程審議会答申を踏まえた改革の動きが、高等学校に軸足が置かれてきたことなどがあった⁷。その後の2007年の文部科学省「大学への早期入学及び高等学校・大学間の接続の改善に関する協議会報告書～一人一人の個性を伸ばす教育を目指して～」によると、「中高一貫教育や現行学習指導要領の実施等により高等学校の多様化と選択の幅の拡大は更に進展している。この結果、特定の分野について高い能力と強い意欲を持ち、大学レベルの教育研究に触れる機会を希望する生徒の増加が予想される。このような生徒の希望に応じ、高等学校段階から科目等履修生として大学の授業科目を履修させるなど、高大連携の取組の拡大によって一人一人の個性・能力の伸長が図られることが期待される。」としている⁸。神戸学院大学も、2009年4月より兵庫県立伊川谷高校との高大連携授業の一環として、「異文化交流」授業をスタートさせた。

3-2 異文化交流授業の意義

(1) 異文化交流から国際教育へ

グローバル化が進展した現代社会においては、世界で起こっていることが自分たちの生活につながっていたり、自分たちの周りで起こっていることが世界につながっていたりする。つまり現代人は、もはや否が応にも世界を意識して生きていかざるを得ない。そこで、異文化を理解することは必要不可欠なのである。



図2. 国際理解教育
(出所) 文部科学省 HP

このことに対して永田成文は、現代世界は、異なる文化を継承している人々の交流が進み、国家レベルから個人レベルまで様々な文化摩擦が生じている。人々の文化摩擦を少なくし、世界の人々が文化的に共存・共生するためには、異文化理解を深める学習を教育の中に積極的に取り入れていく必要があると指摘した⁹。瀬田幸人は、ユネスコの「国際理解教育の手引き」を引用しながら、国際理解教育の目標として①平和な人間の育成、②人権

意識の涵養、③自国認識と国民的自覚の涵養、④他国・他族・他文化の理解の増進、⑤国際的相互依存関係と世界の重要課題の認識に基づく世界連帯意識の育成の5つの項目のうち、③と④が特に異文化理解教育で扱わなければならない項目であると指摘した。そして、国際理解教育の実践には、異文化理解教育は不可欠なのである。言い換えれば、国際理解教育の中の重要な分野の一つに異文化理解教育があると述べている¹⁰。

これに関連して文部科学省は、1996年の中央教育審議会の「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」の中で、以下のように提言している。国際化が進展する中であっ

て、広い視野とともに、異文化に対する理解や、異なる文化を持つ人々と共に協調して生きていく態度などを育成することは、子供たちにとって極めて重要なことである。国際理解教育を進めていくに当たって、特に重要と考えられることは、多様な異文化の生活・習慣・価値観などについて、「どちらが正しく、どちらが誤っている」ということではなく、「違い」を「違い」として認識していく態度や相互に共通している点を見つけていく態度、相互の歴史的伝統・多元的な価値観を尊重し合う態度などを育成していくことである。また、国際理解教育を実りのあるものにするためには、単に知識理解にとどめることなく、体験的な学習や課題学習などをふんだんに取り入れて、実践的な態度や資質、能力を育成していく必要がある¹¹。これらのことから、グローバル化時代に価値観の違いを乗り越えて、異文化を理解するには、国際理解教育の一環である異文化交流授業の重要性がますます高まっていることが分かる。2007年に文部科学省は、「初等中等教育における国際教育推進検討会報告－国際社会を生きる人材を育成するために－」の中で、国際化が一層進展している社会においては、国際関係や異文化を単に理解するだけでなく、自らが国際社会の一員としてどのように生きていくかという主体性を一層強く意識することが必要と提言した¹²。そこでは、多文化共生、文化相対主義的な考えを前面に出し、国際理解教育を一步進めて、国際教育の推進を打ち出した。異文化を理解するには、自ら外国に行き、その異文化に触れる体験を通じるのが最も良い方法であるように思う。しかし、それは時間的な、あるいは費用面の制約のもとで容易ではない。このことから、異文化体験を持った人間が教育の場で、自らの経験談とグローバル化時代における共生の心を伝える授業（異文化交流授業）を行う意義がそこにある。

(2) 伊川谷高等学校の異文化交流授業

兵庫県立伊川谷高等学校は、昭和51年4月、西神地区最初の県立全日制普通科高校として開校されました。校訓は、「自主・協同」である。伊川谷高等学校のHPによると、異文化交流の授業は、「日本は輸入大国であり、他の国との関わり合いはとても大きい国です。外国との関係をより強くするには、その国の文化を深く知ることがとても大切です。本校では、特にアジアに着目し、その文化を学ぶ授業として2年で「アジア地誌」、3年で「異文化交流」を開講しています。異文化交流では、高大連携授業の形態をとり、神戸学院大学の教員を特別講師としてお招きし、アジア以外の地域も含めて、研究成果などについて講義を受けています。外国の文化に興味をお持ちの皆さん、是非アジアの国々の文化に触れてみましょう。」との目的を持っている¹³。



写真 1. 異文化交流授業風景①



写真 2. 異文化交流授業風景②



写真 3. 異文化交流授業風景③



写真 4. 異文化交流授業風景④

伊川谷高等学校の3年生は1クラス40名までで、例年6～8クラス編成で推移し、そのうち1クラスが理系で残りが文系クラスとなっている。今年度は、文系5、理系1クラスになっている。異文化交流授業は、3年生の文系クラスの選択科目の位置づけとなっている。同授業は、例年20～40名程度の受講者であったが、今年度は10名に留まっている。神戸学院大学との高大連携の一環として行われているこの授業は、当初、大学側から11名の教員が12講義（1講義50分）を担当していた。現在は10名で15講義を担当している。伊川谷高等学校から神戸学院大学への講師派遣依頼状によると、この科目の目標は、国際的視野をもち、自ら考え行動できる生徒を育成するとともに、高大連携を推進するとなっている。また、高校の担当者によると、科目目標からは本来ならば科目名を異文化理解教育とした方がいいかも知れないが、語学系の科目ですでにその科目名が使用されていたため異文化交流という科目名になったそうである。大学側から派遣される講師の授業の前には、その教員の専門地域について地理の授業で事前学習を行う。しかし、行事やテスト等を優先せざるを得ない時もあるので、十分な時間をかけて事前学習を行うことが困難な時もあるそうである。

筆者は、2010年より年に2回、伊川谷高等学校で異文化交流授業を行っている。ここでは、バングラデシュについて授業をさせて頂いている。この授業のお話を頂いた時に、高等学校の学生にとって、異文化を理解するには何から始めればいいのかを考えた。そこで、まずは食文化から説明しようと考えた。それは、筆者が初めてバングラデシュへ出発する前にスパイスの効いた南アジア料理の克服からスタートしたと繋がる。（写真③を参照）

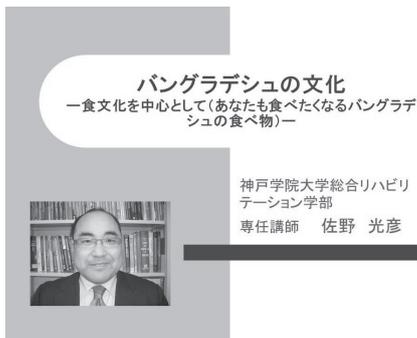
①異文化交流授業のねらい

- ・異文化（バングラデシュ）について、衣食を中心にふれる。
- ・大学の講義レベルのことを、高校生にもわかるように平易な言葉を使い授業をおこなう。専門用語も丁寧に解説しながらおこなう。
- ・文化の違いを乗り越えるには、何が必要か考えるためのヒントを得てもらう。
- ・私たちの生活も世界に繋がっていることを理解してもらう。
- ・異文化理解には、言葉以外の学習も必要であることを伝える。

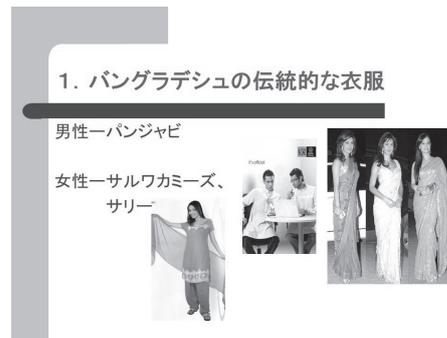
このような大まかな目標を設定し、以下のような内容に取り組んだ。

②内容

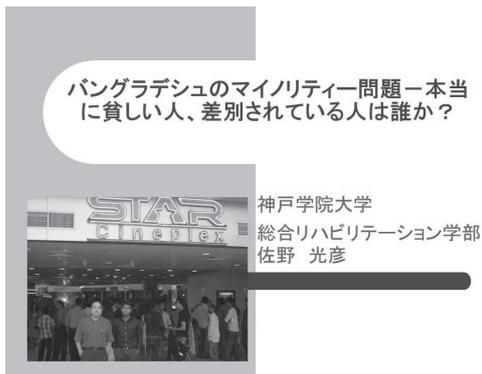
- ・ バングラデシュの食文化にふれてもらうために、お菓子の試食を実施した。
 - ・ 民族衣装の試着を実施した。音楽についても取り上げた。
 - ・ バングラデシュと日本の生活文化の共通性と差異について説明した。特にイスラム教徒の生活について説明した。
 - ・ 差別、貧困、人権、格差社会について、同国の清掃労働者や物乞いの人々の生活実態を例に取り上げた。
 - ・ 貧困解決手段として、グラミン銀行の活動を取り上げ、その限界を提示した。
 - ・ グローバル化の時代を説明するのに、ユニクロのバングラデシュ進出を取り上げ、私たちの生活と繋がっていることを示した。
 - ・ バングラデシュの2つの世界遺産（バゲルハットモスクとシュンドルボン）を例に上げ、自然保護、環境問題、歴史的建造物保護の大切さへの理解を促した。
- 上記のような内容で授業をすすめ、次節のような生徒たちの感想を得た。



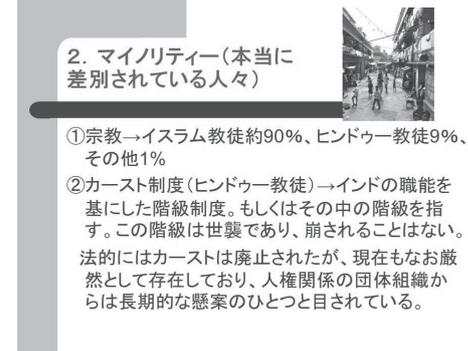
資料 1. 異文化交流授業スライド①



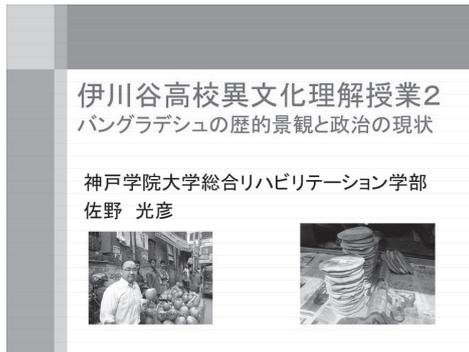
資料 2. 異文化交流授業スライド②



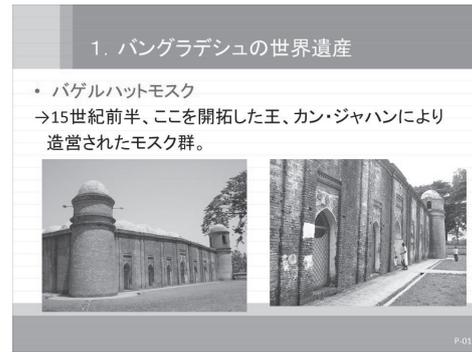
資料 3. 異文化交流授業スライド③



資料 4. 異文化交流授業スライド④



資料 5. 異文化交流授業スライド⑤



資料 6. 異文化交流授業スライド⑥

3-3 異文化交流授業の効果

高校生たちは、毎回、興味深く筆者の授業を真剣に聞いてくれた。彼らの感想をここでは、2つに分類し一部を紹介したい。(生徒たちのコメントは、あえて原文のままにした。) また、今年度(2014)は受講者が10名と少なかったが、簡単なアンケートを実施したので、合わせてその結果も記しておきたい。

①外国やバングラデシュに興味を持った感想

- ・バングラデシュは今までよく知らなかったけれどこれを機に暇があれば調べてみたいと思った。
- ・バングラデシュはまったく知らなかったけど、講義のあと、テレビとか見ているとバングラデシュのニュースだったり、バングラデシュ製の商品だったり、バングラデシュ出身の芸能人だったり、とても耳にしました。
- ・バングラデシュについて、悪いイメージしかなかった分DVDを見たり、服装について色々話を聞いて印象に残った授業になりました。
- ・じっさいの衣装等を見たりふれたりしたことが楽しかった。
- ・バングラデシュは、初めは世界地図のどこにあるのかもわからなかったけど、知ることができたし、バングラデシュのたべもの、めずらしい服なども生でみて、さわって貴重な体験をさせてもらいました。
- ・授業を受けるまで、ほとんどと言っていいほどバングラデシュのことを何も知らなかったけど、事前学習や先生の講義を聞いて国自体のことや日本との関係・文化などについて深く知ることができたと思います。
- ・自分が知らなかったことを知っていくのはすごく楽しくて自分からネットを使って治安や観光を調べるのが好きになりました。1年間の授業で習った国はまだわずかで習った国の周りにある国にも興味を持って1つでも多くの国を知りたいと思っています。いろいろな国を知って自分の視野も少し広がったように感じます。私はまだ1国も海外に行った事がないので自分の目でいろんな事を見たいと思います。この授業を受けて少しでも自分が変わったことをうれしく思います。

②宗教, 差別, 貧困などの具体的な問題に関する感想

- ・ バングラデシュの衣服や食べ物などを持ってきていただいたり, 実際にバングラデシュに行ったときの話をしてくれたりなど, 楽しい講義でした。また, イスラム教やカースト制度について地理の授業で習っていたので頭に入りやすく, 面白い授業になりました。
- ・ 先生が言っていた, 「貧乏な国は無い, 貧乏な人がいる」という話を聞いてなるほどと思いました。
- ・ まずバングラデシュという国を知らなかったのでそこを分かることができた。あとは差別の問題が一番ためになった。差別された人は仕事がトイレそうじだったりして, かわいそうだと思ってしまった。国の環境はよくなっているが差別の問題があることを学べた。
- ・ バングラデシュというところがいまいまいちわかっていなかったけど, バングラデシュの話をきいて, 食文化はこうゆうのなのかとわかったり, 貧富の差が激しいことも知りました。自分の家庭が貧しいから保護を受けるために子供にわざとケガさせているとか, 子どもをさらって奴隷として使っているとかそういうことを教えてもらってすごく印象に残っています。こういう子たちがなくなるといいなと思うと同時に, 私たちも何かしなければならぬんだと思いました。

(3) 授業に関するアンケートから

「異文化交流」授業に関するアンケート

「異文化交流」授業を体験して、皆さんがどのようなことを学んだのが、意識や態度に変化がもたらしたのかを知るためのアンケートです。

- 5: 強く思う
4: やや思う
3: どちらでもない
2: あまり思わない
1: まったく思わない

★この授業を体験して

- | | |
|--------------------------------------|-----------|
| 1. 外国の人との交流の楽しさがより感じられた。 | 5 4 3 2 1 |
| 2. 異文化圏の人をこれまでより身近感じる。 | 5 4 3 2 1 |
| 3. 自国、自文化についてより深く学びたいと感じる。 | 5 4 3 2 1 |
| 4. 異文化圏の文化について、より深く学びたいと感じる。 | 5 4 3 2 1 |
| 5. 交流を深めるためには、自分から働きかけることが大切であると感じる。 | 5 4 3 2 1 |
| 6. 交流に大切なのは言葉・言語の習得であると感じる。 | 5 4 3 2 1 |
| 7. 言葉以外のコミュニケーションは異文化圏の人と交流する上で役に立つ。 | 5 4 3 2 1 |
| 8. イスラム教について、少し理解できた。 | 5 4 3 2 1 |
| 9. この授業は、私にとって有意義、または将来役に立つと思う。 | 5 4 3 2 1 |
| 10. 外国に行ってみたく思った。 | 5 4 3 2 1 |

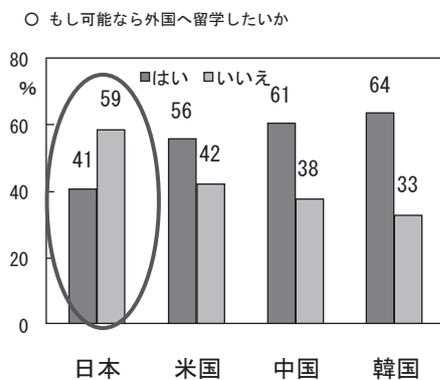
★この授業を体験して、あなたが得られたと思うこと、あなたが変わったと感じることを自由に記述してください。

このアンケートは、杉本千恵のものを参考に作成した¹⁴。回答者（受講者）がわずかに10名であったが、以下のような結果を得た。1～10までの項目のそれぞれの平均値は、1=4.6, 2=4.2, 3=4.1, 4=4.8, 5=4.6, 6=4.3, 7=4.5, 8=4.7, 9=4.7, 10=5.0であった。この結果から、以下のようなことが推測される。1と2の値が低いのは、講義担当者は外国人ではないこと。3の値が最も低いことは、グローバル化が進展すれば、自国文化を外国人に説明する必要性が高まることを踏まえると、今後の課題として受け止めたい。4が高い値にあることは、生徒たちのコメントにもあるように、この授業をスタートとして外国に興味を持ってもらえたのではないかと考えることができる。6と7の値が低いのは、

この授業のねらいでもある異文化交流には、言語習得以外にも文化などの理解も必要であることを分かってもらえたのではないだろうか。今年度は、ISIL（イラクとレバントのイスラム国）がニュースで話題になっていたこともあり、イスラム教徒の日常を説明した。生徒たちからは、イスラム教の怖いイメージが払しょくされた、価値観の違いを認め合わないといけないなどのコメントが寄せられた。しかし、イスラムの日常生活とテロがどのように結びついているのかなどは説明する時間がなかったため、8については低い値を示す結果となった。10については、今の日本の若者があとでみるように内向き指向といわれる中、全員が外国に行ってみたいと思ってくれたことは、この授業の最大の効果であるように思える。

生徒たちは、実に様々な感想を述べてくれた。バングラデシュという知らない国について、この授業で取り上げたさまざまな文化にふれたり、見たり、聞いたりしながら一緒に学んでくれた。この異文化交流の授業の前には、高等学校の方で事前学習がなされており、その重要性も生徒たちの意見から理解することができる。生徒たちは、格差、貧困、差別の問題にも興味関心を示し、その解決策の模索について考えてくれた。また、自分たちの生活が世界と繋がっていることも理解してくれた。異文化交流には、言語取得以外の文化理解が必要であること、つまり多文化共生の大切さも学んでくれた。このようなことから、この異文化交流の授業はある一定の効果があったことが伺える。

4. おわりに—今後の課題と展望



出典：「中学生・高校生の生活と意識—日本・アメリカ・中国・韓国の比較」（日本青少年研究所、2009年2月）

図3. 中高生の海外への意識
（出所）文部科学省 HP
図1. に同じ。

最後にこの異文化交流授業の課題と展望について、ふれておきたい。大学の教員にとって、普段90分の講義に慣れているので、高等学校の50分授業に対応するのに、時間配分のやや工夫が必要となる。大学の教員にとって高大連携の授業はいい機会なので、どうしても多くを伝えようとし、その取捨選択が難しい。筆者も異文化交流の授業を初めて担当した時は、生徒たちに多くを伝えすぎて、消化不良を起こさせた経験がある。異文化との比較から、文部科学省が提言しているような、高校生の自己のアイデンティティ（identity）確立のために、この異文化交流の授業に何ができるのか。図3.によると、

今の日本の中学高校生は、外国に留学したくない人が59%と諸外国に比して、高い値を示している。この内向き指向といわれている若者に、外国に興味を持ってもらうためには、さらに何が必要なのか。また、異文化交流授業を文部科学省が新しく提唱している国際教育へどのように橋渡ししていくのか。これらの問題についても、今後考えていきたい。

また、事前授業の実施が生徒たちの感想にもあったが、事前授業と異文化交流授業との連携強化を、高等学校の教員と図っていきたい。例えば、今注目を浴びている反転授業のような形式、事前授業で基礎的な知識を学び、それをもとに考える授業を異文化交流授業

で展開, そして事後の授業でさらに理解を深めていくなどが考えられる。このことがまさに新しい高大連携授業の姿を, 映し出すことにつながっていくであろう。

謝辞

本稿は, 兵庫県立伊川谷高等学校の魚住和晃先生と同校の生徒たちの多大な協力なしには, まとめることはできなかった。深く感謝の意をあらわしたい。そして, 伊川谷高等学校の生徒たちには, グローカルなこの時代に, 世界的視野でものごとを考え, 伊川谷や神戸で行動する, 伊川谷や神戸のことを考え, 世界で活躍する人材になってもらいたい。

注

- 1 中学校学習指導要領(平成10年12月)第4総合的な学習の時間の取扱いの3には, 以下のように記載されている。「3.各学校においては, 2に示すねらいを踏まえ, 例えば国際理解, 情報, 環境, 福祉・健康などの横断的・総合的な課題, 生徒の興味・関心に基づく課題, 地域や学校の特色に応じた課題などについて, 学校の実態に応じた学習活動を行うものとする。」, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1320061.htm (2014年10月25日閲覧)
- 2 黒崎卓, 山形辰史(2005)『開発経済学-貧困削減へのアプローチ』日本評論社, pp.191~194。
- 3 坂本利子(2013)「異文化交流授業から国内学生は何を学んでいるか-多文化共生育成めざして」『立命館言語文化研究』24巻3号, pp.143~144。
- 4 文部科学省 HP, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryu/_icsFiles/afiedfile/2012/02/14/1316067_01.pdf (2014年10月25日閲覧)。
- 5 文部科学省 HP, http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/04/_icsFiles/afiedfile/2011/04/21/1305175_01_4.pdf (2014年10月25日閲覧)。
- 6 コトバンク HP, <https://kotobank.jp/word/%E9%AB%98%E5%A4%A7%E9%80%A3%E6%90%BA-882990> (2014年10月25日閲覧)。
- 7 佐藤正昭(2002)「「高大連携」の背景といくつかの課題」『青森保健大紀要』4(1), p31。
- 8 文部科学省 HP, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/020-17/houkoku/07032207/all.pdf (2014年10月25日閲覧)。
- 9 永田成文(2010)「高等学校地理における地域調査学習の実証的研究-異文化理解の深まりを視点として-」『三重大学教育学部研究紀要』, 第61巻教育科学, p.273。
- 10 瀬田幸人(2007)「異文化理解教育で扱うべき文化要素について」『岡山大学教育学部研究集録』, 第134号(2007)p.129。
- 11 文部科学省 HP, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701n.htm (2014年10月25日閲覧)。
- 12 文部科学省 HP, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/026/houkoku/05080101/001.htm (2014年10月25日閲覧)。
- 13 兵庫県立伊川谷高等学校 HP, <http://www.hyogo-c.ed.jp/~ikawadani-hs/> (2014年10月25日閲覧)。
- 14 杉本千恵(2004)「異文化コミュニケーション教育の現状と課題(1)~授業実践の点検を通して~」, 『鳥取短期大学研究紀要第50記念号』, p.46, p.51。

参考文献

- [1] ブリタニカ・ジャパン(2011)『ブリタニカ国際大百科事典 小項目電子辞書版 2011年4月改訂版』, ブリタニカ・ジャパン。